

シリーズ・編集部座談会《こんな話&あんな話》

電気工事業界における《学校》の役割と必要性を改めて考える①

【出席者＝本紙編集部一同】

☆突然決まった!? 東電協スクールの廃止について

司会者 東京電業協会が電気工事士養成所として独自に設立し、54年間の歴史をもつ東電協スクール（東京電気技術高等専修学校）がこの春で閉校になるんだってね。なんか唐突な感じがするけど。

記者B そうですね。本紙のロング・インタビューのゲストとして、東電協スクールの菊地潔校長を取材させていただいたのが昨年9月。そのときは「来年度以降の抱負」も語っていただきましたしね（笑）。

記者C そうですね。最近を受講生が定員に満たない状態がずっと続いていて、運営はけっこう大変らしいという認識は確かにありました。だけど、こんなに早く閉校が決まるとは思ってもいませんでした。

記者A 菊地校長も講師のみなさんも、いずれも業界の大先輩・大先達たちで、「骨のある後進」の指導に情熱を傾けておられただけに、とても残念です。

司会者 ユーキャンを始めとする通信制講座をパパッと受けて、国家資格試験に合格すれば、とりあえず第2種電気工事士は取れてしまうという時代だしね。だから卒業と同時に第2種の資格が取れる指定校というだけでは、1年間も授業料を支払いながら通うということに意義を見出せないという考え方が、例えば仕事をさせながら社員を通わせる立場にある業界各社などにも、強くなってきていたということなのかもしれないね。

記者A 確かに文系学部出身の新人から事務職の女性に至るまで、会社のバックアップで入社後にどんどん第2種電気工事士の資格を取得していくという風潮もありますからね。「促成栽培でない、本物の電気工事士を育成する」という東電協スクールの理念はよくわかりますが、とくに若い経営者が率いる業界各社からの関心は薄れてきていたのかもしれない。

記者C とはいうものの、東電協スクールには独特の「良さ」があったのも事実です。そこのところがなかなか伝わらないという嫌いはあったのかも。

司会者 その東電協スクール独特の「良さ」というのを、ここで再び考えてみようよ。同時になぜその「良さ」が、業界的には古びたものとしてとらえられるようになったのかということについても。

記者B そうですね。東電協スクールが無くなることを単に惜しむだけじゃなく、そういう検証が必要ですよ、業界の今後のためにも。

記者A それは賛成ですが、その前に、年間1万6000人ぐらいが毎年新たに第2種電気工事士の技能試験に合格しているそうですが、その人たちにとっての第2種電気工事士という資格に対する価値観についても、考えてみるべきだと思います。

司会者 おお、確かにその通りだね。端的には単なる「取りやすい資格」としてしか見ていない人たちも多いただろうから。

記者C 一言でいうと、取得しやすい国家資格の一つという側面が強いのではないですか？第2種電気工事士というのは。

記者A 資格コレクターの間ではそうだろうね。

記者B 毎年合格するという1万6000人のなかの多くは、いざというときの転職などにひょっとすると役立つかもしれないという程度の興味かもしれない。今はさまざまな分野の産業で電気工事が必要な世の中だから、余計にそうなのかもね。

記者C ただ、単なる資格コレクターとか、なんだかよくわからないけど転職の際などに役立つかもしれないという程度で資格を取得するような認識の人は、東電協スクールの廃止という話題とは別に考えたほうがいいのかもかもしれません。少なくとも東電協スクールに通

うような人は、かなりの確率ですでに電気工事関連の会社に勤めている人か、新たにそういう会社に勤めたいと思っている人たちのはずですから。

司会者 それは言えているね。問題は、そういう電気工事関連会社に強い興味をもっている人たちにとっての、あるいは社員をわざわざ通わせようとする電気工事関連の企業にとっての、東電協スクールの位置付けがどう変化してきたかということだろうからね。

☆いま養成すべきは技能者と同時に技術者

記者A 昨年だったか「寿司職人論争」というのがありましたよね。

記者C あった、あった。

記者A 東電協スクールの今回の廃止の背景にも、それに似た要素があるような気がするんです。

司会者 「寿司職人論争」というのは、マスコミにもよく登場する実業家H氏の発言がキッカケになった、あれかい？

記者A そうです。

記者B 寿司の専門学校に行けば、例えば3か月ぐらいで一通りの技術を学んで卒業し、一人前の職人として店頭に立てるというケースが今は多い。にもかかわらず、相変わらず一人前になるには10年の修行が必要だというような業界の論理は旧弊すぎるし、不合理じゃないかということでしたよね。

記者A 世界的な寿司・和食ブームを背景に、職人の数はいくらいてもいい時代ということも、背景にはあるのでしょうか。一人前になるのに10年間かかるなんて悠長すぎるというような……（笑）。

司会者 それを業界にあてはめると、文系学生でも女性事務員でも入社後に勉強すれば、資格はそんなに時間をかけずに取れるのに、東電協スクールに1年間も通う必要はないのではないかというようなことになるのかな？

記者B そうですね。

記者C ただ、それを単純に当てはめると、ちょっとピントがズレてくるのでは？寿司職人という仕事は別に資格でも何でもなし、そういう意味ではかなり主観的な世界ですよ。経験が不足している職人の握る寿司でも旨いという人がいて、それで繁盛す

ればいいわけだし。でも国家資格としての第2種電気工事士の資格は、技能者としての入口、業界資格の入口でしかない。

記者A とにかく現場で施工するには絶対に必要な資格だからね、第2種電気工事士は。寿司の世界のように資格という意味でのアバウトさはない。

司会者 ただ確かに、東電協スクールが掲げていた「本物の技能者、促成栽培でない技能者」を育成するという理念は、10年間の修行をへた上で初めて一人前になれるという昔ながらの寿司職人観と相通じる、いい意味での本物志向があるよね。

記者B 東電協スクールを半世紀以上も運営してきた東京電業協会は、ある意味、その本物志向の「いい部分」を、業界の内外にきっちり発信しきることができないままに、きてしまったのではないのでしょうか。

記者A 東電協スクールの廃止が惜しまれてならないというのは、そこですよ。ま、今後は専門講座の形で、東電協スクールの「本物の技能者を輩出する」という理念は引き継がれていくみたいですから、それに期待したい気持ちも強いですけど。

記者C いろいろな会社の人間同士が一つ屋根の下で一定期間を過ごし、学び合うという、いわゆる同じ釜の飯を食った仲間をつくる「場」というのは、失われるとなると簡単です。だけど、それを構築するにはものすごい時間がかかる。

司会者 東電協スクールの半世紀以上の歴史の重みというのは、これまでに何人卒業させてきたかということなど以上に、実はそこに集約されてくるのかもしれない。専門講座を立ち上げるのはもちろん、結構なことだよ。だけど半世紀以上の歴史をもつ東電協スクールを廃止するのであれば、東京電業協会は、ある意味、技能者以上に育てるのが難しい状況があるとされる現場代理人の養成に関して、かつての東電協スクールが実現していたような、会社の枠を超えた人材育成の「場」を構築してみたらどうだろうか。

記者A あ、それは賛成ですね。就職後3年以内に辞めていく人材というのは、技能者志望よりも技術者（現場代理人）志望の人のほうがかなり多いみたいですからね。

記者B ぼくもそれは同感です。（以下、次号に続く）